

東京都美術館 ニュース

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS



東京都美術館
TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM

No. 474

Interview

浅田真央

ASADA Mao



数々の記録と記憶に残る
選手時代の活躍を経て、
現在は自らプロデュースしたアイスショーで
私たちが魅了し続ける浅田真央さん。
ショーを創り上げる際に
「絵画などからインスピレーションを
受けることが多い」という
真央さんに、アートへの思いなどを
うかがいました。

After numerous unforgettable, record-breaking performances as an athlete, ASADA Mao continues to amaze us with her production of ice shows. "Often I get my inspiration from paintings and other artworks," she says. We asked Mao about her thoughts on art.

表現力が磨かれ、心も癒されるアート

アートとの出会いは、20代の選手時代、当時のコーチから「表現力を磨くために、絵画や芸術作品にたくさん触れなさい」とアドバイスされたことがきっかけです。それまでアートとはあまり縁がなかったのですが、遠征先の街で美術館に足を運ぶようになり、多くの刺激や感動を与えてもらえるのと同時に、心が癒され、リフレッシュできることもわかりました。

初めてゆっくりとアートを鑑賞したアメリカのボストン美術館のことはよく覚えています。世界選手権の後に気分転換も兼ねて友人と訪れたのですが、モネの描いた《睡蓮》の池の色合いに心を奪われ、ピカソの絵に入り、数ある銅像や彫刻の芸術性の高さに感銘を受けたものです。

柱や天井などにも細かい装飾が施され、建物自体がアートのような美術館も多いですね。外観から美しい美術館には心惹かれます。

多くのインスピレーションを受けて

選手時代にも、そしてアイスショーなどで活動するようになった今でも、多くのアートからインスピレーションを受けていると感じています。その一つがロシアでみた、印象深い男性と女性の像です。きれいな体のフォルムに一目で魅了されました。指先から爪先までポーズが完璧で、どの角度から眺めてもさまになる、美しい男女の像でした。

現在全国展開中のアイスショーの中に、『シェヘラザード』（千夜一夜物語）があります。選手時代にもシングルで滑った演目ですが、今回は男性スケーターとのペアプログラムで、大人の妖美さや男女の駆け引き、切なさなども表現しなければなりません。その世界観を創り上げるときにも、あの美しい男女の像が頭の片隅にあったように思います。

アートから受ける刺激、感動、表現力…
ショーを創り上げるうえで
インスピレーションをもらっています

Stimulation, emotion, expression... Art inspires me in my creation of shows



浅田真央（あさだ・まお）

1990年生まれ。愛知県出身。フィギュアスケーター。選手時代には全日本選手権、世界選手権、GPファイナル、四大陸選手権などの大舞台で優勝多数、2大会連続で出場したオリンピックでは銀メダルと6位入賞を果たすなど数々の偉業を成し遂げる。2017年に現役引退、翌年よりプロに転向。座長としてリンクに立つアイスショー「BEYOND（ビヨンド）」は、「フィギュアスケートの枠を超えたエンターテインメント」と評され、2023年6月まで全国ツアー開催中。



絵画や彫刻は言うまでもなく芸術作品ですが、アイスショーも芸術作品になることを目指し、「みている方に美しいと感じてもらえること」「常に挑戦し、進化し続けること」を念頭に置いて創っています。同じ題材で描いても人によって違った絵になるように、同じ演目でも演じる人、演じる時期が異なれば別物になります。アートにふれ、さまざまな経験を積むことで、同じ演目でも選手時代より進化し、表現力の増した演技を披露できていると思います。

「色」を選ぶ時間も楽しい！

選手時代からたしなんでいた「大人の塗り絵」は今でも続けていますが、引退してからは自分でも絵を描くようになり、今ではすっかり趣味の一つになりました。疲れているとき、リラックスしたい時に描きたくりますが、絵筆を握って

いると他のことを考えずに“無”になれるので、あっという間に時間が過ぎていきます。

大好きな花の絵は特によく描きます。そして、塗り絵でも自分で描く絵でも、どんな色にするか考えるのが好き。例えば、ピンクだけでも何種類もありますよね。どのピンクを選ぶのか、どんな組み合わせがきれいか、力強さを表現するには何色を加えるといいのか…こんな風に色を選ぶ時間は楽しいものです。私のアイスショーでも色は大切な要素で、みてくださる方に美しいと感じてもらえるように、衣装や照明には多くの色を使うように工夫しています。

最近では友人の誕生日プレゼントに絵を描いたり、自分でもリビングに飾ったりしています。好きなものを自分で選んだ色で描いているので、みると自分自身が癒されますし、スケートをがんばる活力にもなっていますね。

想像力を働かせた後でタイトルをみます

美術館ではすぐにタイトルはみずに、まずは作品だけをみて、何を表現したのか、どんな思いが込められているのか、想像を膨らませています。ひとしきり作品に思いをはせた後にタイトルに目をやるのですが、自分が想像していたものと合っていることもあれば、全く違うことも。そこからパネルの説明などを読み、作品の背景や作者の思いを理解しようとします。

特に注目してみるの、色使いと構図。遠くから近くから、いろいろな距離からみて、「近くからだとこんな色に見えるんだ」と驚いたり、「花ってこういう色を入れることで華やかさだけではなく深みが増すんだ」と感心したり。衣装のデザインを考えるとときなど、絵画の色使いに学ぶことが多いですね。

今は全国ツアー中なので時間がとれないのですが、“今後(または再び)行きたい美術館・美術展の候補”というものがあります。ルーブル美術館、金沢21世紀美術館やこちらの東京都美術館もその候補に入っていて、春から開催される「マティス展」はアイスショーが一段落したらぜひ訪れたいと思っている展覧会の一つです。マティスの描く女性も魅力的ですし、豊かな色彩の作品が多いようなので、その色使い、筆使いをみてみたい。

《豪奢、静寂、逸楽》という作品は独特のタッチで描かれていますよね。どうすれば点だけで絵が完成するのか、その技法を目の当たりにしてみたいです。また、《コリウールのフランス窓》も、気になる一枚です。どうして窓だけを、この色で描いたのか。そこには何らかの意図があるはず。実際に間近でみながら、また想像力を膨らませてみたいです。

start

When I was an athlete in my twenties, my coach recommended that I have exposure to art to refine my expression, so I started going to art museums. While greatly stimulated by art, I also found that it healed me emotionally. At the Museum of Fine Arts, Boston, I first had a chance to thoroughly appreciate art. The paintings by artists such as Monet and Picasso and the many bronze statues moved me deeply.

I have often taken inspiration from works of art from my athlete days to this day. Among them is a sculpture of a man and woman I saw in Russia that instantly captivated me with its beautiful form. The ice shows I currently do feature me in pair programs with a male skater, and when expressing the seductive beauty of the body or the game of love between a man and a woman, that beautiful statue is always at the back of my mind. I myself paint, and I particularly enjoy the time spent choosing colors. Color is a crucial element in ice shows. I devise ways to use many colors in costumes and lighting.

At an art museum, I first simply view the artworks, trying to imagine what they express and the thoughts behind them. Then, I look at the titles and read the explanations.

“Henri Matisse: The Path to Color” opening this spring at the Tokyo Metropolitan Art Museum is an exhibition I very much want to see. The work *Luxury, Calm and Pleasure* is painted with a striking touch, don't you think? How do you paint a picture using only dots? I want to see that technique with my own eyes.



マティス展

Henri Matisse: The Path to Color

会期

2023年4月27日(木)～8月20日(日)

展覧会公式サイト

<https://matisse2023.exhibit.jp/>

展覧会の舞台裏

Creating Exhibitions

1926年の設立当初から、作品発表の場として美術等の「公募団体」の発展を支え続けてきた東京都美術館。「都美セレクション グループ展」は、その歴史を踏まえ、新しい表現を追求する現代作家たちの集団による展示活動を支援する事業として、2012年のリニューアルを機に開始した展覧会です。2023年度の開催に向け3つのグループが選出され、現在準備を進めています。

Since its founding in 1926, the Tokyo Metropolitan Art Museum has served artist groups as a public venue for their exhibitions. Building on this history, the Museum launched "Group Show of Contemporary Artists" on the occasion of its Grand Reopening in 2012 to encourage contemporary artists who are exploring new directions in art. For the 2023 installment, three artist groups have been selected and are currently preparing their exhibitions.

複数性を楽しむ

Plurality, for a richly expansive viewing experience.



ギャラリーA

浮遊する作家たち

鹿野震一郎《枝（赤、銀）》

2016年 油彩、カンヴァス（参考作品）

KANO Shinichiro, *branch (red, silver)*,

2016, oil on canvas (Reference work)

copyright the artist, courtesy Satoko Oe Contemporary

「都美セレクション グループ展」の会場となるのは、当館の正面入口からは一番奥まった位置にある、ギャラリーA・B・Cです。この3つの会場で、公募により選出した異なる3つのグループによる展覧会を同時開催します。地下3階のギャラリーAを会場とする**浮遊する作家たちは**、絵画と写真作品により構成される展覧会「**イメージの痕跡—記憶とリアリティのあわい**」を開催します。同じ階にあるギャラリーBでは、京都に拠点を置くメンバーで結成された**自己と他舎**が、映像と写真を中心とする展覧会「**海のない波**」を、地下2階のギャラリーCでは、同じ美術大学・大学院で絵画を学んだ作家たちからなる**糸会**が、「**絵の辻**」を開催します。

本展で開催される各展覧会はそれぞれに別々のテーマをもち、多くの場合、作品の雰囲気なども会場ごとに趣が異なるように感じられます。しかし、隣り合わせで開かれるこれらの展覧会を互いに照らし合わせながらみていくと、時に、離れた立ち位置にあるようにみえていた展覧会や作品が、実は同じ意識や視点で結びついていることに気がつくこともあり、その中に



ギャラリーB

自己と他者

堀井ヒロツグ《遠くから触れられている》

2022年 3チャンネル・ビデオ・インスタレーション(参考作品)

HORII Hirotsugu, *Touched from the far beyond*,
2022, 3-channel-video installation (Reference work)

現代社会の課題や時代性のようなものが浮かびあがてることがあります。このように、ひとりの作品だけを鑑賞した時には得られないような、奥行きのある体験ができるのも、複数の作家そしてグループが、同じ時、同じ場に集まる、本展ならではの醍醐味です。

「公募団体」の展覧会でもなく、特別展のように大規模なものでもないこの現代作家たちによる展覧会は、当館の中で異色な存在と言えますが、熱気あふれる展示を毎年心待ちにしてくださっている固定ファンの方もいらっしゃるようです。また、入場無料ということもあり、他展の鑑賞の帰りに立ち寄ってくださるお客様も非常に多く、普段「現代美術」に触れるチャンスがあまりないという方々と、現在進行形で制作をおこなう作家たちとの思いがけない出会いの場となっている点も、本展の重要な意義だと感じられます。まずはロビー階からガラス越しにギャラリーを覗き込んでみてください。きっとそこには、皆様の「みたい!」という気持ちが駆り立てられるような空間が広がっているはずです。ご来場をお待ちしています。

(東京都美術館 学芸員 大内曜)



ギャラリーC

糸会

尾関 諒《花 花瓶》

2022年 油彩、カンヴァス(参考作品)

OZEKI Ryo, *flower vase*,
2022, oil on canvas (Reference work)

"Group Show of Contemporary Artists" has been held annually since 2012 to encourage contemporary artists who are exploring new directions in art. For "Group Show of Contemporary Artists 2023," the three artist groups **Floating Artists, self-and-others collective**, and **itokai** have been selected and are now preparing their exhibitions.

In Gallery A, **Floating Artists** will hold an exhibition of painting and photographic works entitled "**Traces of Images: Between Memory and Reality**." In Gallery B, meanwhile, **self-and-others collective** will hold an exhibition focused on video and photography, "**Waves Without the Ocean**." In Gallery C, the artists of **itokai**, who studied painting at the same art university and graduate school, will hold "**Intersection of Paintings**."

At this group show, where plural artists and groups gather to exhibit during the same period, visitors enjoy a richly expansive viewing experience not possible in a solo artist's show of works. Because admission is free, moreover, numerous viewers casually walk in, and the venue becomes a scene of unexpected encounters between people rarely exposed to "contemporary art" and artists now actively in creating artworks. Herein lies the Group Show's important significance. Be sure to visit.

(OUCHI Hikaru, Curator)

都美セレクション グループ展 2023

Group Show of Contemporary Artists 2023

□会期

2023年6月10日(土)~7月2日(日)
休室日6月19日(月)

□会場

ギャラリーA・B・C

人と作品、人と人、人と場所をつなぐ

Art Communication

美術館が作品を鑑賞する場にとどまらず、鑑賞を「体験」として、より深める場所になるように、さまざまなアート・コミュニケーション・プログラムを展開しています。今回は、「学校がしんどい」と感じることもとその保護者を対象とした、とびラーによるプログラムについて紹介します。

The Museum offers Art and Communication Project designed to take visitors beyond simple viewing to a deeper "experience" of the artworks. This time, we look at programs created by *Tobira* for children who find school a "difficult place" and for their parents and guardians.

多様な子どもや家族に寄り添い 「居場所」としての美術館を届ける

Spending time with children and their families at the museum, a "place" where they discover ways to participate.



東京都美術館 × 東京藝術大学 とびらプロジェクト

とびらプロジェクトとは、美術館を拠点にアートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインプロジェクトです。都美を拠点に東京藝術大学と連携して行い、一般公募されたアート・コミュニケーター(愛称:とびラー)が、学芸員、大学教員らと共に活動しています。とびラーの活動「とびラボ」では、日々新たなプログラムが生まれています。

Tobira Project is a social design project to foster community through art, with the art museum as a base. In cooperation with Tokyo University of the Arts, art communicators (called *Tobira*) selected from the general public undertake museum-based activities in collaboration with curators and university faculty. New programs are continually launched at "Tobi-Labo" meetings.

「とびラボ」とは？

What is "Tobi-Labo"?

とびラーが自主的に行うミーティングを「とびラボ」と呼びます。「とびラボ」では集ったメンバーのアイデアやできることを大切にしながら、美術館を楽しむプログラムや、人々をつなぐ対話の場をつくっています。

"Tobi-Labo" consist of meetings independently planned and led by *Tobira*. At "Tobi-Labo," the *Tobira* use their own ideas and abilities to create programs for enjoying the museum and opportunities for people to talk and connect.

「学校がしんどい」と感じる 子どもと保護者のためのプログラム 「おいでよ・ぷらっと・びじゅつかん」とは？

Oideyo, puratto, bijutsukan ("Welcome to the art museum any time"): a program for children who feel "school is a difficult place" and for their parents and guardians.

よく晴れた11月の土曜日、3組の親子を迎えて「おいでよ・ぷらっと・びじゅつかん」を開催しました。「学校がしんどい」と感じる子どもを対象とするこのプログラムでは、こどものペースや関心に寄り添う過ごし方を大切に、とびラーとペアになってゆったり美術館をまわります。2021年から「とびラボ」の活動として始まり、今回は3回目の開催となりました。学校や集団行動が苦手な子どもと接したとびラーの経験や、「多様な子どもたちに美術館を居場所のひとつとして知ってほしい」という願いから生まれた企画です。

自己紹介の後、子どもととびラーは今日の気分や過ごし方について相談します。今回の活動のポイントは、美術館にある作品や建物をよく見て「お気に入り」を写真に撮ってくる。とび





おいでよ・ぶらっと・びじゅつかん *Oideyo, puratto, bijutsukan* ("Welcome to the art museum any time")

ラーは、こどもたちが安心して自分の気持ちを表現できるよう、言葉を持つことを大切に対話をすすめました。日本語が苦手な子、車椅子で移動する子など、一人ひとりにあわせたコミュニケーションを取りながら美術館を探検します。開催中の「展覧会 岡本太郎」の作品を見たり、建物のデザインや色を観察したりしながら、言葉や写真で発見を伝え合いました。到着した時はこわばった表情のこどもたちでしたが、徐々に緊張がほぐれ、後半には満面の笑顔で館内を巡る姿がありました。

こどもたちが展覧会に出かけている間、保護者もとびラーと建物や屋外彫刻を散策しました。この時間には「忙しい保護者の方にも、自分の視点で美術館を楽しんでもらい、また家族で訪れてほしい」というメッセージも込められています。

こどもたちが撮影した写真は、とびラーオリジナルの「パスポート」に貼って持ち帰ることができます。アンケートでは「学校で所在なげにしているこどもが、美術館で新しい発見ができたよう

でよかった」「親子それぞれの体験を帰ってから話すのが楽しみ」などの感想が寄せられ、充実した時間だったことが語られました。

とびらプロジェクトは始動から10周年を迎えましたが、常に活動の軸にあるのは、一人ひとりの眼差しを大切にする対話の場づくりです。人々の心の豊かさの拠り所として、美術館での過ごし方をひらいていく活動を、これからも続けていきたいと考えています。

(東京都美術館 学芸員 峰岸優香)

Oideyo, puratto, bijutsukan is a program planned and facilitated by *Tobira* for children who find school difficult and for their parents and guardians. Initially started as a "Tobi-Labo" held by *Tobira*, the program was held a third time since its 2021 start. Forming pairs with a *Tobira*, children walked around the museum, the *Tobira* giving careful attention to each child's pace and interests. Participants, among them children poor at Japanese and children using wheelchairs, viewed artworks at the "Okamoto Taro: A Retrospective," observed the art museum building, and enjoyed strolling around the museum with the *Tobira*. Their parents and guardians also formed pairs with other *Tobira* and had fun seeing the museum and conversing with *Tobira*. Participants had varying impressions afterwards, such as "Children who find school boring were able to make new discoveries at the museum" and "The children and adults looked forward to going home and talking about their experiences."

(MINEGISHI Yuuka, Curator, Learning and Public Projects)

公募団体・学校教育展

東京都美術館は、年間約270団体の展覧会が開催される「公募展のふるさと」です。
美術団体や学校教育機関などが作る新しい作品との出会いの場をさまざまなトピックでご紹介します。

The Tokyo Metropolitan Art Museum is "the home of the public entry exhibition."
Each year, some 270 groups hold exhibitions here. Visitors can enjoy encounters with new works
by art groups and school education institutions, presented under a wide range of topics.

1920年代までに創立された団体展 ～美術館の歴史とともに

An integral part of the Museum's history—Art Group Exhibitions formed in or before the 1920s



紀元二千六百年奉祝美術展 搬入作業 出典：『美術日本』（6巻11号1940年11月）

1926(大正15)年に開館した東京都美術館は、2026(令和8)年に創立100周年を迎えます。現在当館で展覧会を開催する団体の中には、美術館と同じ時代を歩んだ歴史を有するところが少なからずあります。そこで今回は、当館の創立と同じ1920年代までに結成され、加えて開催回数90回を超えて今も公募展を継続している団体の中からいくつかご紹介したいと思います。

まず日本美術院は、1898(明治31)年に岡倉天心の指導理念のもとに橋本雅邦、横山大観、下村観山、菱田春草によ

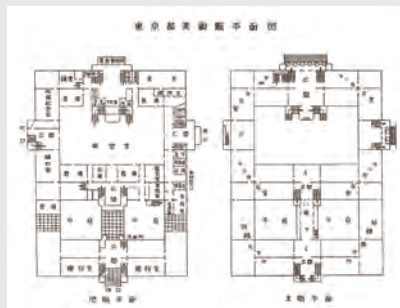
って設立されました。主催する院展は、今年(令和5年)再興108回を数えます。明治期の創立からいったんは中断しましたが天心没後の1914年に再興され、今日まで活動を継続しています。

今年110回となる日本水彩展を主催する日本水彩画会は、石井柏亭、丸山晚霞、南薫造、矢代幸雄ら37名の画家、評論家が発起人となり当館開館前の1913年に創立され、同年に第1回展を上野公園内・竹の台陳列館で開催しています。もうひとつ開催回数が100回を超えた特色ある団

体が朱葉会です。1918年に創立されたこの会は、日本で初めての女流画家公募団体として創立委員のひとりと与謝野晶子が名を連ねています。画家として活動する女性の研鑽と発表の場として今日まで続いており、ちなみに朱葉会と命名したのは与謝野晶子だと言われています。

書の団体としては、90回の開催を迎える書壇院の前身となる書道研究会が吉田苞竹により1919年に創設されています。また、全国学校書初中央展を開催し、書写教育の向上普及事業を行う日本習字学会が設立されたのは、1924年でした。

日本パステル画会は1927年に画家の矢崎千代二により創立され、2年後の1929年には第1回展が開催されます。創立者の矢崎千代二は、日本でのパステル画の普及を目指すとともに、国産によるパステルの製造にも尽力した人物でした。そして、現在当館で本展の開催は行われていませんが、1907年に始まる日展の日本画部春季展(日春展)が母体となる新日春展をはじめ、1914年に設立された二科会による春季二科展、二科東京展、そして



東京都美術館旧館 平面図 出典：『開館三十周年記念 東京都美術館概要』（東京都美術館、東京都教育委員会 1955年4月）

1925年に梅原龍三郎を迎え洋画部門が設けられたことに始まる国画会による受賞作家展・国展秋季展も開催されています。

1926年の美術館開館以後も、次々と新たな団体が設立され当館を舞台に作品を発表し続けています。現在当館で90回を超える開催を重ねている団体もここでご紹介した他にも少なくありません。これまでに第二次大戦など大きな困難に見舞われた時代もありましたが、文化芸術の伝統は今日まで営々と受け継がれてきたと言えるでしょう。

(東京都美術館 学芸員 加藤弘子／柴田友里子)

Founded in 1926, Tokyo Metropolitan Art Museum will mark its centennial in 2026. Below, in anticipation of that event, we introduce several art groups still active today that were formed in or before the 1920s, when the Museum was founded.

Nihonbijutsuin, established in 1898, ceased operating briefly but was revived in 1914. And Nitten established in 1907, the Japan Watercolor Society was founded in 1913, followed in 1914 by the establishment of the NIKA ASSOCIATION, which holds the SPRING NIKA ART EXHIBITION and NIKA TOKYO SHIBUTEN. Syuyoukai was founded in 1918 as Japan's first female art group,

and continues operating on that footing today. As for Sho (calligraphy) groups, THE SHODAN-IN in its previous incarnation was founded in 1919, and NIHON SYUJI-GAKKAI in 1924. KOKUGAKAI, which holds the KOKUTEN Prize Winner Exhibition and KOKUTEN Autumn Exhibition, embarked in 1925. Finally, the NIHON PASTEL GAKAI was established in 1927.

Many art groups besides those named above have held exhibitions at Tokyo Metropolitan Art Museum over 90 times. Despite World War II and other troubled times in the past, the traditions of culture and art continue today.

(KATO Hiroko, Curator / SHIBATA Yuriko, Curator)

美術情報室の前川國男コーナーと 当館建築関連の資料をご紹介します

The Library and Archives "MAYEKAWA Kunio corner" and publications related to the Museum's architectural design

美術情報室では特定のテーマで資料を集めたミニコーナーをいくつか設けています。そのうちの 하나가、日本モダニズム建築の巨匠である前川國男のコーナーです。前川はル・コルビュジェに学び、独立後は日本を代表する建築物を数多く手がけました。1975年に竣工した東京都美術館の新館も前川の設計によるものです。前川國男コーナーでは、前川自身や、当館を含めた彼の建築の特徴がわかるような書籍を紹介しています。また、前川コーナーの図書以外にも、『東京都美術館ものがたり』などで当館の建築について触れているほか、雑誌『新建築』と『近代建築』に、2010年から2012年に行った大規模改修に関する特集記事が掲載されています。当館の建築にご興味・ご関心がありましたら、ぜひ情報室にもお立ちください。

(東京都美術館 学芸員 高城靖之)



美術情報室の前川國男コーナー

The Library and Archives "MAYEKAWA Kunio corner"

参考資料

『東京都美術館ものがたり』東京都美術館編、鹿島出版会、2012年
『新建築』新建築社、87巻6号、2012年5月、pp.121-129
『近代建築』近代建築社、66巻7号、2012年7月、pp.49-56

The Story of Tokyo Metropolitan Art Museum, Kajima Institute Publishing Co., Ltd., 2012
Shinkenchiku, Shinkenchiku-Sha Co., Ltd., vol.87, no.6, May, 2012, pp.121-129
KINDAI KENCHIKU, KINDAIKENCHIKU-SHA CO.,LTD., vol.66, no.7, July 2012, pp.49-56

The Library and Archives has special displays of materials under a particular theme. One is a corner devoted to MAYEKAWA Kunio, the master Japanese modernist architect. After apprenticing with Le Corbusier, Mayekawa designed numerous important buildings in Japan as an independent architect. The new building of Tokyo Metropolitan Art Museum, completed in 1975, is one of them. The Mayekawa Kunio corner features books on Mayekawa and the characteristics of his buildings, including this

museum. Also available, besides books in the Mayekawa corner, are publications such as *The Story of Tokyo Metropolitan Art Museum* that touch on the museum's design, and issues of the magazines *Shinkenchiku* and *KINDAI KENCHIKU* with feature articles on the Museum's major project of renovation from 2010 to 2012. Visitors interested in the Museum's architectural design are encouraged to visit the Library and Archives.

(TAKASHIRO Yasuyuki, Curator)

TOPICS

Fire Drills 消防訓練



「もしも」に備えて

Preparing for Emergencies

地震や火災、停電などは、多くのお客様が館内にいらっしゃる時に発生するかもしれません。そんな「もしも」の時に、迅速かつ安全に避難誘導ができるよう、東京都美術館では年に2回、上野消防署の指導のもと消防訓練を実施しています。初期消火の訓練をはじめ、館内の防災設備の確認、視覚障害者や聴覚障害者の方や怪我をした方を想定した誘導、安全な車椅子の持ち方の確認、AEDの操作方法を学習するなど、美術館に勤務するスタッフ全員を対象に行っています。

日頃よく知っているはずの館内でも、防火戸が閉まっていたり、電気が消えていたりすると、いつものようにスムーズに移動できないことがあります。そんな時にスタッフ自身がパニックにならないようにしておくことも訓練の大切な目的の

一つです。防火戸が閉まった状態での避難経路を確認したり、いつもは施錠されている非常口から外に出たりと、「もしも」の時にスタッフ自身が落ち着いた行動ができるよう、一人ひとりが真剣に実践しています。

このような経験が生かされないことが一番ですが、皆様に安心安全な美術館をお楽しみいただくためにも、「もしも」に備えた訓練をこれからも続けてまいります。（東京都美術館 管理係）

To provide visitors quickly and efficiently with evacuation guidance in the event of an earthquake, fire, power outage, or other emergencies, the Tokyo Metropolitan Art Museum conducts fire drills twice a year under the fire department's supervision. All staff members participate in conducting initial-stage fire extinguishing drills, checking the building's disaster prevention equipment, assisting disabled and injured people, confirming safe handling of wheelchairs, and learning how to operate AEDs. So that everyone can be confident of enjoying safe and secure museum visits, we will continue to conduct training in preparation for emergencies. (Management Section)

岡本紙文具店 代表取締役社長

岡本光正 さんOKAMOTO Mitsumasa,
President,
OKAMOTO PAPER AND STATIONERY Co., Ltd.

下町の風情を残しつつ、最先端の店も軒を連ねる上野界限。
今回は創業150年を迎えた老舗文具店のオーナーが
上野の魅力を紹介します。

The Ueno area features many trendy shops while retaining the
mood of Tokyo's old downtown quarter.
The owner of a venerable stationery store marking its
150th anniversary describes the charms of Ueno.



2022年で創業150年を迎えた
岡本紙文具店の5代目社長、岡
本光正さん・祐子さん夫妻。浅
草通りに面した上野駅すぐの好
立地で、開店は朝9時。「10時オ
ープンの店が多いので助かる」
と喜ばれている

OKAMOTO Mitsumasa and wife
Yuko, the fifth-generation president
of Okamoto Paper and Stationery
Store, which celebrated its 150th
anniversary in 2022. Conveniently
located by Ueno Station on Asakusa
Street, the store opens at 9 am.
"Many stores open at 10 o'clock,
which is helpful."

創業150年、上野の“駆け込み寺”的文具店 “Made in Japan”を求める外国人旅行者にも対応

Ueno's 150-year-old "sanctuary" stationery store. Serving foreign travelers in search of "Made in Japan."

当社の社名に「紙」が入っているのは、1872年の創業当時、障子や習字、トイレ用の紙を中心に近隣の寺社に納めていたからです。時代とともに扱う品物は移り変わりましたが、1世紀半もの長きにわたり商いを続けてこれたのは、上野の地に根を下ろし、お客様のご要望に沿えるよう努めてきたことが大きいかもしれません。現在は、昔ながらの定番文具から最新のハイテク文具、各種パーツ、雑貨に至るまでリクエストに応じて揃えているため、「どこにもないものがある!」「ここに来れば相談に乗ってもらえる」など、文具の“駆け込み寺”的に利用してください

方も多く、ありがたい限りです。

また、店の前には循環型観光バスの停留所があり、ほかの観光地や空港からのアクセスもよいので、コロナ前は外国人観光客の方も大勢おみえになっていました。日本製の文具は海外でも大変人気で、ボールペン等をごっそり買っていく方も。海外のお客様に共通しているのは、“Made in Japan”の表示があるかどうかを熱心に確認されることです。私どもはつたない英語と通訳アプリを駆使し(笑)、お客様も身振り手振りでなんとか伝えようとしてくださるので、海外の方とのコミュニケーションは楽しかつ

たものです。今はまだ完全にコロナ前には戻っていないので、またあのにぎやかな日々がくるのを心待ちにしています。

仕事終わりには、妻と一緒にこの界隈をよく散歩しています。定番ルートは東上野からパンダ橋を渡って公園、藝大方面に抜け、動物園の下まで降りて不忍池を1周する、約1時間のコース。休日には谷根千まで足を伸ばすこともあり、定番ルートにアレンジを加える程度ですが、飽きることはありません。谷中では雑貨店などを覗き、扱う商品やディスプレイの参考にすることもしばしば。「こんなところに新しい店が!」「今度ゆっくり来よう」などの発見も楽しく、季節ごとの草花を愛でられるのも上野の魅力です。

私は人生の大半を上野で過ごしていますが、こんなに色々な顔を持ちながら、コンパクトにまとまった街はないと感じています。歴史ある神社仏閣、多文化でにぎわうパワフルなアメ横、四季折々に姿を変える不忍池、そして上野の山を越えて美術館などが立ち並ぶエリアに入ると、流れる空気がガラリと変わりますよね。少し歩くだけで別の街に来たかのように表情が違ふ。徒歩圏内でちょっとした旅気分が味わえるので、飽きがこないのかもしれません。

上野に来られる皆さんにぜひ立ち寄りしてほしいのが、美術館の出入り口付近にあるミュージアムショップです。そこでしか購入できないレアグッズもあるので、ゆっくり展示をみる時間がない方でも、例えばポストカードの1枚も入手して自宅に飾るだけで心がやすらぎますよ。というのも、自分たちがそうして気軽にショップにお邪魔し、購入したグッズを飾るだけで、アートが日常に入ったような、満ち足りた気分になるからです。上野には様々な美術館、博物館がありますから、お気に入りのミュージアムショップを見つけて、ぜひプチアート体験をしてみてください。



文具のピクトグラムを配した看板が目印。オフィス用品・ビジネス機器専門商社としての業務も

The store's sign blazoned with stationery pictograms is a landmark. The store also operates as trading firm specializing in office supplies and business equipment.



オリジナル商品も制作・販売しており、第1号は名刺サイズ91×55mmをネーミングに取り入れた、その名も「91552」。名刺を2枚並べることができる名刺入れ

The firm now also produces and sells original Okamoto Paper and Stationery Store products. Their first is "91552," a business card holder named for the standard 91×55mm size cards it holds and its ability to display "2" cards side by side.

Founded in 1872 to sell shoji paper and restroom paper to nearby temples and shrines, we greeted our 150th anniversary in 2022. In front of the shop is a bus stop for the local sightseeing bus, and access from the airport is also good, so foreign visitors often came to the store before the Covid-19 pandemic. Japanese stationery products are famous for their high quality, so foreign visitors always check for the "Made in Japan" label before buying. Things are not yet 100% back to how they were before the pandemic, so we are anxiously waiting for those active days to return.

When work finishes for the day, my wife and I often go walking in the area. Our standard course is once around a circular route, crossing from East Ueno on the Panda Bridge to the Park and Tokyo University of the Arts then down to Shinobazu Pond. We also sometimes walk to Yanesen (the three neighborhoods of Yanaka, Nezu, and Sendagi).

I have lived most of my life in Ueno. Only in Ueno, I think, do you find a district so compact yet having so many different faces. Ueno has different areas, each with its own distinct mood—historical temples and shrines, the bustling multicultural Ameyoko market street, and the art museums. Within walking distance, one gets a feeling of going on a trip.

We particularly want people to stop in the museum shops when they come to Ueno. Pick up an art postcard at your favorite shop. You can display it in your home for an artistic atmosphere.

◀◀ あの日・あの時 Playback! TOBI ▶▶

※東京都美術館は2026年に100周年を迎えます。

開館以来、美術家団体の新作発表や世界と日本の名品、名画の展覧会場として親しまれてきた東京都美術館は、子供たちの作品発表の舞台でもありました。東京都教育委員会主催の「国際交歓子供美術展」は、1948年に「こどもの日」が制定されたことを記念し、1952年まで毎年開催されました。1951年の展覧会では、旧館2階のおよそ半分を占める12の展示室に国内から選ばれた小・中学生の作品と海外から寄贈された作品をあわせた1293点が展示されました。展覧会終了後に日本の作品はアメリカへ贈られ、海外渡航が難しい時代に国際親善の役割をも果たすことになりました。写真にはアメリカの子供達が描いた学校の風景を熱心にみる子供達の姿が写し出されています。(米岡響子)



国際交歓子供美術展 1951年撮影

International Goodwill Children's Art Exhibition, 1951 photo

Familiarly known since its founding as an exhibition venue for new works by artist groups and masterpieces from Japan and the world over, the Tokyo Metropolitan Art Museum also gave a stage to displays of children's artworks. The "International Goodwill Children's Art Exhibition," organized by the Tokyo Metropolitan Board of Education as an event commemorating the designation of "Children's Day" in 1948, was held here annually until 1952. After each exhibition, artworks by Japanese children were sent abroad to foster international goodwill in an era when traveling overseas was difficult. (YONEOKA Kyoko)

東京都美術館 ニュース No.474

TOKYO METROPOLITAN ART MUSEUM NEWS

発行日 2023年3月31日

発行 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館

企画・編集 東京都美術館 広報担当

デザイン 株式会社ファントムグラフィックス

翻訳 アムスタッツ コミュニケーションズ

印刷 望月印刷株式会社

©Tokyo Metropolitan Art Museum

*掲載情報に変更が生じる場合がございます。
最新情報は公式サイトでご確認ください

東京都美術館

〒110-0007

東京都台東区上野公園8-36

Tel 03-3823-6921

Fax 03-3823-6920

公式サイト

<https://www.tobikan.jp>

Twitter

tobikan_jp

tobikan_en

Facebook

TokyoMetropolitanArtMuseum

表紙の
作品

アンリ・マティス 《豪奢、静寂、逸楽》1904年
ポンピドゥー・センター／国立近代美術館

Henri Matisse, *Luxury, Calm and Pleasure*, 1904,
Centre Pompidou, Musée national d'art moderne, Paris

Centre Pompidou, Paris, Musée national d'art moderne-Centre de création industrielle

